

## 古代学協会研究報告 第11輯 糞置荘・二上遺跡の調査研究

糞置・二上遺跡は福井市南部の文殊山の北麓に所在する。一带は奈良時代に東大寺荘園糞置庄が置かれたと場所にあたる。この東大寺荘園の実態を明らかにするため、当協会創始者の角田文衛が戦後数回にわたって調査を企画、指導した。昭和27年の第1回は大阪市立大学により行われたが、昭和28年の第2回調査は発足間もない古代学協会によるはじめての調査であった。この第2回調査の際、近傍に弥生土器が散布する地点があることがわかり、簡単な調査が行われた。つづいて、弥生時代遺跡の解明を主目的として、昭和31年に第3回調査が行われた。

遺物としては土器が多量に出土しており、北陸で「月影式」と呼ばれる弥生時代終末期の土器型式に属するものが大半であり、きわめて多様な器種が含まれている。受け口を呈し口縁に擬凹線をほどこす甕や、口縁が大きく伸びる鉢、そのほか装飾器台などがある。いわゆる外来系の土器はまだ限られていて、古墳時代らしい斉一的な内容に変わるまえの地域色の強い土器群として評価される。



- 第1章 遺跡地の地形と環境
- 第2章 調査研究のあゆみ
- 第3章 調査の概要
- 第4章 出土遺物
- 第5章 考古学的分析と評価
- 第6章 越前国足羽郡糞置村開田地区の現地比定

編集：竹内 亮・山本 亮  
平成27年3月20日発行  
A4版、本文90頁 図版9頁  
頒価：800円（税別・送料別）

〒604-8131

京都市中京区三条高倉

公益財団法人 古代学協会  
<http://kodaiigaku.org>

Tel.075(252)3000 Fax.075(252)3001

郵便振替 01080-4-850